

# 目次

序 章 場の記憶…………… 5

## I 中世社会史の考古学

館と寺社…………… 18

中世都市・梁川のイメージ…………… 36

南部氏城館の実像…………… 50

付論Ⅰ 猪久保城―焼き払われ、埋められた主殿…………… 58

陸奥南部における中世村落の様相…………… 62

中世東国の道とマチ―考古学からみた『都市的な場』…………… 76

中世の「みち」―遺跡と遺構から…………… 94

付論2 栃木県下古館遺跡―東国の街道と流通拠点……………110

## II 東北のものづくり

福島県における中世陶器生産の様相……………122

―梁川古窯八郎窯跡群を中心として―

東北の中世窯と常滑窯……………138

東国のかわらけ……………150

土器の系譜……………166

中世東国の土器と建物……………178

陸奥南部における古代鉄生産……………192

付論3 北東日本海域の鉄生産……………208

東北地方南部の近世窯業……………212

近世小型窯の系譜……………222

相馬の近世製塩……………234

終章 考古学から見た中世奥羽……………243

初出一覧

あとがき

遺跡名索引



## 序 章 場の記憶

### 一 大地に刻まれた記憶

私は自ら遺跡を調査する以上に、調査している遺跡を見に行くのが好きである。休日にはよく各地の遺跡を見に行く。「変人という意味を込めて」好きだね！」と友人・同僚によく言われる。

「遺跡」はご存じの通り、「遺構」という地面に刻まれた痕跡を掘り出し、再現することによって、具体化できる。その過程で様々な遺物も出土する。つまり、遺跡は「大地に刻まれた記憶―歴史―である」と私は思っている。遺構の一つひとつは何の変哲もない穴であるが、それを調査し、解釈し、総合化するときに初めて、歴史資料となりうる。また、遺跡は地域の歴史や環境の中で形成されたことを忘れてはならないと私は思う。よく「発掘調査報告書」を拝見すると、遺跡―遺構や遺物―だけが一人歩きして、地域の歴史や環境の中に遺跡を位置付けることを忘れていると思う報告書があり、残念な思いをすることが多い。私が遺跡を見に行く理由の一つは、「どういう歴史や環境の中に遺跡があるのか」を確認したいからである。

これは一例であるが、山形県遊佐町<sup>ゆさ</sup>大楯遺跡<sup>おおだて</sup>をいく人かの同好の士と、見学に行く機会があった。その保存された遺跡の現地に立った時に、快晴の空にそびえる雄大な鳥海山を背景に見ることができた。遺跡の北には「月光川」、

南には「日光川」という川が日本海に注ぐ。藤原良章氏によると、鳥海山を「阿弥陀如来」になぞらえ、両川をその両脇待である「月光菩薩」「日光菩薩」になぞらえられていると言う。その懐にいだかれるように、大楯遺跡があることが、遺跡の性格を考え直す契機となったことがある。

さらに、これもご存じのことと思うが、遺跡は経年的な人の営みの集積であり、それを解きほぐして、時代ごとの人々の営みを明確にすることが、発掘調査の第一義的な役割であると、私は考えている。しかし、「発掘調査報告書」を拝見すると、その遺跡が最も「繁栄」した時代のみを切り取って報告されていることが多い。様々事情があることはよく承知しているが、それでは不十分な歴史資料にしかならないのではないだろうか。

例えば、佐賀県の吉野ヶ里遺跡は弥生時代の環濠集落として、「邪馬台国」論争に一石を投じる遺跡として著名である。しかし、発掘調査報告書を拝見すると、古代の官道と駅家、中世の館と町なども報告されている。いずれも歴史的に重要なことは、変わりはない。吉野ヶ里遺跡の通時代的な意味を考えると、各時代の変遷とその歴史的意味を考える視点は、大地に刻まれた歴史を考える上で不可欠であろう。これは、すでに小野正敏氏も指摘していることである。

それは遺跡という「場」に与えられた宿命とさえ感じられるときがある。遺跡がいつ成立し、どういう発展過程を経て、衰退・廃絶し、またいつどういう形で再生してくるか等々を解釈することによって、初めて「大地に刻まれた記憶―歴史」を読み解いたことになる、私は考えている。

以上の二つの視点にこだわることによって、「こんな(面白い)遺跡の解釈もできた」という事例をいくつか紹介しよう。